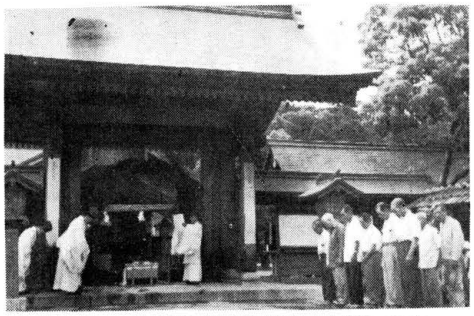
宗像

毎月一日発行
定価一年 送料共500円
発行所
宗像大社
福岡県宗像郡玄海町
電話 神湊 26番

宗像大社御用達
装束神具
松島神輿製作所
京都市下京区北小路通新町西入
電話 (37) 八八六九番
振替口座京都一五八九一番

夏の大祭



送られた数万の人形（ひとがた）

七月三十一日より三日間、恒例によって夏季大祭が斎行された。当日朝から社殿が装飾され、神門には真青な茅の輪がしつらえられた。玉垣と本殿周辺の御末社（二十三社）に下げられた御神燈が美しい。

三十一日午後五時、夏越しの祭りが執り行われた。全国各地より神門の茅の輪の傍に供えられた抜主の大祓詞のあと、久保宮司等がその行列のあとに続き、左右を先頭に茅の輪潜りを行った。参集した氏子総代をはじめ附近の人等がその行列のあとに続き、左右

罪穢祓い清めて！

論説　無鉄砲

暴走とか、無鉄砲とかの言葉は、巷間一般にも用いられる。常識人の滅多にやらないことを、雑作もなく平気でやってのける驚異に値する言動を意味する。若い人がやたらに車を飛ばす神風運転なども、血気の無鉄砲と言うのであろう。一青年のヨットによる太平洋横断などは、成功したから持てはやされたが、無鉄砲の類に入る資格十分である。

戦前の面倒と思いがちな伝統や、社会生活の制約を放棄脱却したい意欲が、何事にも神風運転の病状を呈していると観られる。戦後、日本らしさは悉くよろしくないという空気の中に、成長した若いジャーナリスト等が反動的に戦時中の神風思想を揶揄するかの如き、表現も、少なからず影響しているだろう。

物事がうまくゆかなかった場合に、計画者より、指導者に対して、さまを見る的な反抗が起るのは未熟な人間の持つ悪い常態である。この反抗心理を誘発する敗戦の悪影響は尚続いていて、容易に修正され得べくもない。又誰に対してでもなく、何に向かってでもなく、何となく古いものはよくない誤りだとする軽卒な考え方も、無鉄砲を生む。戦後二十年、長い歴史が遺してきた貴重な伝統を捨てる。更に破壊するという傾向は、心ある人々が強く憂えている緊要事である。日本の伝統に生きてきた精神文化に、少なからぬ関心を持って国内を視察する外人からも、この声が聞かれる。

吾人は海外からもたらされた物質文明を、高度に取り入れ、外国に劣らない物質面の充実した社会を作ってゆくことに異議はない。勿論外国文化の美点も侮ってならぬことである。便利な日常生活はもとより、あらゆる方面に外来の長所を吸収活用してゆくことは必要である。日本らしさを失わない範囲内に於て、優れたものを消化し、身につけて国家も個人もどんどん発展したいものである。

然し何でも古いが故に捨て去り、新しいものだけに置き換えようとする浅はかさ視のみを見つめる暴走が、真に新しいものを創造すると言えようか。

伝統は保護される。今日も亦創造されつつある。そして良きものは長い生命を保つ。だが、従来の伝統を全く踏みにじった反抗的な労作だけでは、創造はあり得ない基礎のない家は建たないのと同様である。

特に日本の文化面に於ては、伝統の確固たる最低線に精神生活の基礎をおかなければならない。空疎な器物はあくまで空疎である。内容を持たぬ形骸である。

やがて東京にオリンピックが開催される。これはわが国にとってはまさに空前の大行事であり、劃期的な日本紹介の機会でもある。世界各国からそれぞれ国情の異った多民族が一場に会し、競技そのもの、得点成績はともかく、この機会にわが国は人種の展覧会を見せてもらうわけであるが、逆にこちらも見てもらう日本展覧会とも言えるだろう。

教えてくれた先生に敬意を表し、自分等が知らなかった事を先に知って活用している者を、自己より優れた人と思うのは当然かも知れない。明治以来、文明の恩恵を欧米にうけた日本人には、多分に拝外思想が浸透している。殊に占領期の米軍の政略によって、多くのゆき過ぎと不必要なまでにアメリカ化された傾向は容易に払拭されないであろう。でも日本を訪れる外人は亜流アメリカ文化を見て、感心もすまい。心ある外人は模倣日本に興味をひかれることもなかろう。却って塗りつぶされたペンキの底にある素朴な美を探索して、日本を知ろうとし、日本を観た感を強めるものと想われる。

幾千年累積された貴重な伝統の中に、創造されてゆく近代日本の姿に感銘を深くすることであろう。

オリンピックの迎客に莫大な費用を使って、道路、ホテル、観光地、その他諸般の施設が進められているが、敗戦の埋下意識と誤解の高度文化が展覧されては、日本人の国土も異術を理解しにくくなる。反発や迎合心理が生んだ暴走無鉄砲は、多額の金をかけても購えない長い歴史が造した伝統の美を、安物のペンキで塗りつぶそうとしているのではないか。日本らしい日本を観せたいものである。

木材と紙とから出来ていると外人が評した日本の家屋には、わが国の気候風土にかなった長所や、民族性のにじみ出た美点も少くない。四囲半襖に一碗の苦茗をたしなむ枯淡味は、電子計算機からは出てこない。

特に精神文化の面に生きてきた、これからも生きつづける生命の鼓動を感得してもらいたいものである。それには、この際、先づ脚下照顧の深い反省が持たれなければならない。

× × ×

今年の御生祭計画について

宗像大社海上神幸御生祭は去る昭和三十七年より約六百年ぶりに復活し、第一、二年度共に良好な成果を収めている。

さて今年はいよいよ第三年度を迎えることになるが、この日取りと関連祭儀についての修正案が社務本局から発表された。

これによると、これ迄は放生会大祭（十月一、二、三の三日間）の一週間前の九月二十三日に行われて来たが、御生祭の竟宴があくまでも大祭のための「新しい神霊を御迎えする行事」であるので、十月一日に行う、という案である。

十月の二日は放生会大祭のうちの本大祭であるので、その前日の一日に行うことは、御生祭が時間的にも放生会大祭に直結することになる訳である。

そこで今年は「一日案」を実行しようということになった次第である。御生祭の神霊が田島の辺津宮に入御と同時に放生会大祭第一日祭が斎行される。

以上の通りの発表があった。各方面の御協賛をお願い致します。

宗像大社献詠歌会詠草

八月九日　於中津宮社務所

人命尊重のお題目は現代世相の暗い面を強烈に突く警鐘である。売上金を狙って無免に運転手を殺傷する街の野獣が絶えない。家族の生活に困るのでなく、くだらぬ遊興費かせぎが、貴重絶対の生命を平気で奪う。警察でも裁判所でも、生命を尊重しない悪魔の人権が尊重され、国家は多くの費用をかけてテイネイな鈔作に末をする。善良な被害者を何とする○わが身の危険を忘れて激流に飛び込み、幼き命を救う青年。利害打算を超えた思案外の快事に惜しみなく讃えられよう。現代世相特に教育のあり方が、極端な功利両面を生んでいる。家庭は勿論もろもろの団体生活に、規律ある親和の精神が必須○数十年前の話、当時の或る宮様に史上の宗教家で誰を最も秀れた人物と見られるかと質問。先ず従者が弘法大師をあげたところ、宮様は文豪大人を推された。遠藤武者盛遠の悪業からめざめて筋金入りの傑僧に成長した人間の姿に、少からぬ感懐があったのであろう。豪族佐伯氏の平安な瑞境に育った弘法大師、粗暴な下級武者の歩む戦路に汚れた垢穢を払拭した人間文豪、仏弟子ということは同じでも悟道の経緯は大きく異っている○「三寸子の心百まで」と四人の男児を育てた婆さんの述懐。二児は既に飛び立ったが、あと二児が巣に居る。朝起すと前から目はさめていたとか、四四目の苦情持はやかまし。三四目の冷飯侍は然々大食学校剣道。製造した機械は同じでも出来ばえは種々様々。鋳型から出た品物のように、質も形も全く同じならあじけない○然ゆるが如き信念と言うが、なかなか燃えないのが信念。容易に燃える如情の炎、こちらがその通りで恥しうござる

（白雲）

阿蒙少言

第四一回

熊本　吉田　寧雄
月の夜の霞につつまれしつと釣と静かに阿蘇の山も眠れり

福岡　高橋　昇
老の身の心恥ちつ孫に説く三つ児も知れる兎と亀と

（大学入試の孫に）

村山田　吉田佐市郎
日曜の今日を田植に家族皆出て留守居の吾は風呂炊く

勝浦　永島　桂翁
我庭の眺めはつきず名児山の妹背の姿優し懐し

神湊　隣船　俊
一円貨出札口の足下に我れは拾ひぬ博多駅にて

吉武　白木うめの
久々に実家を訪へば老母の裾はしよりて早苗取りをり

内殿　岩崎　和荘
血圧で寝てる真夏の日中のひるの日中が長しと思ふ

稲元　滝口　正
早苗取る度に懐かしく思ひ出の瞼に浮ぶ母の歌声

香椎　織田　橡雨
うつは風吹かせて今日もきびしさの午熱の関をいざ越えてみん

戸畑　田中ハツセ
蔡をせし大き口大後足にて砂蹴りかけて境内を去る

多礼　藤崎保五郎
農民の命をけづり萬民の命を救ふ青田の防除

（水田のボリドール防除）

戸畑　伊規須ゆき
海の家の降り止み窓あけて見る玄界灘の梅雨の星空

宮田　片山　一
大方はたたはたるニュータウン乾きの中に赤き施風

福間　井原　元彦
哭かことを覚えし孫のとほしく老を忘れて未来にかける

和布刈　永島　まち
みたま早知ろしめすもの宗像に我が名ののりしそのかしこさを

津屋崎　麦野　時雄
自作せる老人クラブのかぞえ歌かるくふりつけつにおどる

平井　土性　とよ
危険をはらむ米ソの対立やはらけはまたも断たるベトナム戦線

東郷　吉田　信夫
八月十五日近づき亡弟の碑に酒捧げ思ひ切なし

吉留　山下しずえ
友の眼を掠中に強く感じつゝ夕べの磯に樫員ひろふ

筑邦　津留崎初子
はや三十路すぎしと便りのよこしたる吾子ひさびさにふるさと訪へり

名残　竹原　円
炎天に来し競り市は疲れるで安き競り値を眠りつゝ聞く

平井　河野　静子
いこいの園終着駅と思ひつつ帰り行く老を見送るかなしさ

大濠　江崎　琴子
はしゃぐして篤の言葉にくつるげば風さへぬれしこゝちせられて

勝浦浜　永島　文子
炎天下涼売り歩く風鈴に木陰によりて汗拭ひをり

岡垣　早川藤九郎
こゝろゑめておりてきつるなつ衣すゞしくきたる東薄きぬ

（東京の娘に）

朝町　井上陽之助
とつ国の言の葉読むは骨おれて辞書引く疲れあれど楽しき

戸畑　田中ハツセ
雨雲にかすみし島は大島か一人窓辺に去年の夏思ふ

東郷　小野角次郎
追ひ山は飛沫を浴びて前並べを漕ぎ立つ声に走り去り行く

〃　小野　花居
老ぬればたまの行楽吟行し一人の旅路楽しくもあり

香椎　桜井　秀
忽忙の一日は終へて夜に入ればネオンも映す街の泥川

〃　桜井　ツ子
世帯身につまし哀れか四周明き扉寝より覚め吾の狼狽

吉田　占部　由久
いきいきと誰を待つらむ夕門に匂ひこぼるゝ白粉の花

吉留　高山徳七郎
若者のたぎるが如き雄叫びゆらり跡き行く提灯山笠（戸畑）

田島　小野　迪夫
ながれ星見しをな子が落きを母に語るを聞き端居す

（四面へつゞく）

宗像の古記録を探ると、宗像大宮司をはじめ、その家族たちの詩歌が散見する。数は少ないが、その何れもが時世を反映していて興味深いものがある。作品を賢見しよう。

第四十八代長氏、建長二年（一二五〇年）二月中旬孔大寺山に遊び時を賦す。

春日尋山色　登臨対海寛
折花殖二島　坐石見三韓
木葉因風起　雪雲帯暖乾
謝生與底事　吾偏愛閑安

彼には「臨水集」という家集があったというが、今は伝わらない。「此人博学多才ニシテ詩ヲ好ミ歌ヨロム」といわれた程の人であった。閑安を愛した彼は在職五十二年間、内治に意を用いた。在職の間に元寇があり、彼も家臣を率いて博多に於て戦っている。文武不岐の名君であったといえよう。「宗像ノ神朗法楽ノ歌」というのに○千早振神代久しくすむ月のくもらぬ影をなほ頼みつつ

がある。

第五十六代氏重、天授元年（一三七五年）社務職在職十八年。

「文学ヲ好ミ歌ニタクミナリ」といわれた彼は、延文三年三月五日、織幡山に遊んで織幡の神社に詣でた。そこで神職向民部を召して来歴を尋ねた。民部は、当社は「本朝無双の霊地」なる旨を説明し、ついでに風光を指呼して

アレヤ神ヲ御覧セヨ、汐干月ノ桂浦、サヤカタ山ノ山マテモ、ツヽケル海の中道ヤ、名ニオフ神ノ島チトリ、群キル数モ大島ヤ、啼音モチカキ鹿ノ島シラス新羅ノ島モ見エ、唐土船ノ韓泊、サハクヤ神ノ湊風、ソメタル浪ノ色サヽモ、アイヨリ出ル藍ノ島、カノ百合岩ノ大臣ノ故郷ニハナツ鷹島ヤ、浪ノ名重が感興を催して詩を賦した。

織幡何為美仙宮　霊徳吹伝武内風
山下岩松連北直　海蒼石壁向西従
片帆来往響雁浪　孤雁翔翅繋市霧
幽賞心胸無外事　眼前画出一奇峯

「此氏重ノ気性寛仁ニシテ政道と、さも面白く説明したので、氏風月のみを詠嘆している訳には行かなかった。殊に第七十九代氏員の在職期間三十五年間は天文二十一年（一五五二年）以来、一ときとして休む間もない戦乱の明け暮れであった。彼は戦国の濁中にあってよく内治の功をあげ、外敵を防いだ。但しこの中興の英主には後嗣無き為、天正十四年彼の歿後に上代以来の大宮司家嫡流は断絶し、社領も苏没収されたのであった。彼の辞世と いわれるものと和歌が伝えられている。

明々闇々四十二年　即今退矣　築香梵天

○人として名をかるる計り四十二年
消てぞ帰るもとの如くに

四十二才を一期に此の世を去った彼の胸中に去来するものは「無常観」であった。勿を持った彼の木彫坐像が都内山田の増福院にある。

氏員の妻の歌が数首伝られて

○神心生るを放つ鬱にはなお後の世のたのもしき哉

第一宮（辺津宮）に詣でて

○春の山わけつゝ行けば花見人と思ふ心にかかる白雪

夜更けまで双紙を見て

○水茎の跡ある事を尋ねみん命かに語り寝やの燈

年のはじめに

○新しき年のはじめのひぜりめは庭にお到り空に遊べり

氏員出陣の時に

○いつの世に誰が武士の梓弓やたけ心に取ったへけん

最後の歌に深い嘆きが窺われる。

第七十八代氏雄は大内義隆に殉死し、その室菊姫と母君は陶晴賢の指令によって郡内山田に於て弑されているが、その遺詠が残っている。母君は

○秋は来ぬ露は袂におきそひぬなどとだてなく我身なるらん。

菊姫の歌は彼女の遺品の扇面図に

○おのひやれとふ人もなき山中にかけひの水のこころぼそさは

ほかの数首があり、つきせぬおわれさを誘うものがある。

そのほかの大宮司家の秘史が窺われる作品の数々ではある。

宗像大社 九月祭

一日　風鎮祭　午前十時
かぜしずめの祭、稲の結実前の大事な時期に台風其他の悪天候によって災害を被らないように神に祈願する祭

二一日　宮地嶽神社大祭
旧摂社宮地嶽神社の秋季大祭、本宮から職員が献幣する。

二四日　秋分祭　午前十時
——皇霊殿遙拝式——
春の春分祭に対してこの時期に行われる。秋の彼岸の中日にあたる盆祭とあせて我国の三度の祖霊をまつる大事な機会である。

十月一日　御生祭
大島中津宮発御　午前八時半
辺津宮着御　正午
来る十月一日からの秋季大祭（放生会）に先立って行われる神迎行事で、玄界灘の神ノ島沖津宮神嘗を大島中津宮にお迎えして、中津宮神饌と合わせ、大島より郡漁業組合全員が参加して御座船を中心に一大海上パレードを展開する。

九月の交通訓
無事祈る両手でいつも安全運転

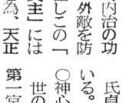
中津宮たなばた祭

去る八月七日、夕刻より、大島中津宮境内末社牽牛社前に於てたなばた祭が斎行された。

夕刻より参道両側には御神燈が吊るされて夕闇の中に白く浮き上った。七時半から、村長、公民館青年団関係者が多数参列して、祭典が行われた。牽牛社前には天の真井の泉から流れた細流がさやさやと音を立て、対岸の織女社との年に一度の再会の説話は、この時参列者自身のものとなった様であった。補設された竹の小枝には村の小中学生等が諸々の願い事を書きつけた色紙が続々とつるされて、枝もたわわしなっていた。

やがて八時半頃より、公民館。青年団、小中学生達によって七夕踊りが行なわれた。オリンピック音頭、白浜節等に合わせて浴衣姿の男女の手拍子が深更まで鳴り響いた。（写真は織女社の祭壇）

宗像談話室　大宮司家の詩歌



神湊郵便局竣工祭

去る八月五日午前七時、宗像大社剣道部少年十二名と職員二名が長崎県遠征の為出発した。行く手は大村市今津郷陸上自衛隊第松部隊と佐世保市相浦町武道場である。前者は部隊と神社とのいろいろな関係によるものであり、後者は昨年相浦武道会が当地を訪れて下さったお返しである。

七月以来月余の早天が少々怪しい。元気な顔をして小学生六名、中学生五名が大社に参集した。

無事を祈願して参拝後午前七時三十分のバスで出発。八時東郷駅着。早岐で乗り替えて竹松駅に着いたのは午後二時であった。駅には自衛隊の尾笠原さん（六段）が出迎えに来ておられた。挨拶の後

「早速ですが、五島の剣道少年一行百余名が今日の行事を終って大村市附近の見学をしています。それに合流して見学をすませ、五時頃部隊に入りましょう」

それはいい、というので御配慮による車に乗り込んだ。

第一目標は菅瀬ダム。これは田水調節の目的のためつくられたもので、丁度降り出した小雨の中を五島の一行と共にダムの橋を渡り、帰りはダムの中の階段を上り下りした。満々と湛えた青い水、至る所の景巌の水が美しかった。

第二目標は大村火力発電所、しかしここは取り込み中で見学できず、第三目標の大村飛行場へ向った。飛行場は部隊のすぐ隣りにある。この辺は元の海軍航空隊のあとで、今も一部は海上自衛隊大村航空隊になっている。千二百米のこじんまりした滑走路の上を双発のプロペラ機が発着していた。

午後五時頃竹松部隊の営門を入る。司令部の二階が宿舎にあてられた。司令幸崎二佐に挨拶。ここはペットにマットである。環境が変ったので少年たちの反面に物珍しがってはしゃいだ。その日は夕食、入浴をして寝ついた。就寝ラッパの鳴る頃は大半は疲れて眠っていた。一晩中雨の音。

朝六時起床。ラッパで飛び起きた。洗面もそこそこに剣道の防具を着装して練心館道場に集る。すでに部隊の剣道部員の稽古が始まっていた。早速稽古をして一と汗流した。部隊の藤原剣道部長、一瀬大段、尾笠原六段、吉原六段ほかの方々が稽古台になって下さった。シャワーで汗を流し、朝食を終った。セルフサービス式の配膳が少年たちには興味深かったらしい。

十時、再び防具を着用して道場に集合。大村市内の少年が約六十名来隊していた。わが宗像大社の剣道部を迎え討たんが為である。向うは四チーム編成。こちらは一人で四回試合をせねばならない。

始めはこちらの少年たちはコチコチに固くなっていた。だが試合場に立てばそこは百戦のつわ者？何とか元気を出して堂々と渡り合った。どうやら恥しくない成績であった。

午後は隊内の五十米プールで遊んだ。

傑作一つ。少年が売店へ行った。所在を営兵所の歩哨に尋ねた。

「おじさん、売店どこですか」

「はい、こちらであります」

丁寧に案内をしてくれたという。翌朝も稽古。終ってから部隊の広報館見学。大場二曹が案内してくれた。

展食後離隊。その前に司令に挨拶。たった二日間の営内生活ではあったが何となく心が残る。駅前迄自動車で送って下さった。部隊の剣道部の皆さんが営庭の土堤に駆け上って手を振って下さった。

（次下次号）

剣道部長崎県遠征記（一）

大村市と佐世保市に合宿錬成

社務日誌抄

八月一日　夏季大祭第一日。
総社祭午前十時斎行。
二日　夏季大祭第二日
三日　出光興産神戸支店長来社
四日　茶華道講座開催、
五日　少年剣道部十数名佐世保市へ親善試合に出向。
七日　勝屋酒造社長宝物館寄附金の件にて来社。内山緑地建設宝物館造園工事中。
八日　福岡交通センタービル地鎮祭
九日　献歌会大島中津宮に於て開催。
一二日　日高工務店増築の件について来社。
一三日　門司税関黄谷氏他四名来社。
一五日　月次祭午前十時斎行。午後七時より風俗舞打合会
一七日　カリホルニア、サンマテオ在住森内平五郎夫妻来社。西鉄、洲賀薬所長二名新退任挨拶
二〇日　国学院大学生一名、当社研究の為来社。鳥居移転の為山野石材店係員来社。
二一日　八幡宗像会山路虎夫氏来社。
二二日　宝物照石碑用黄石採取の為職員一同遠賀郡波津海岸へ出向。
二三日　十四号台風、当地被害殆んど無し。旱天の慈雨。
二四日　文化財保護委員調査官財津氏外六名一切経修理の件にて来社。今後の方針懇談。
二五日　竜谷大学学生三十八名来社。
二六日　沖津宮詰の久保宮司来社。

時雨の筑山御殿（三）

宗像四郎氏貞（十九）

山下半可　作
福田長庵　画

流石に戦国の武将であった。むくりと起き上がると自ら、手早く身仕度をすませ、うろたえ騒ぐ側室どもに、

「覚悟せよ」

と一言だけ云い捨てて表へ出ていった。

表はただならぬ空気であった。家臣らは武器を携えて主君の出るのを待っていた。

「台所に湯づけの仕度をさせよ」

「家臣を集合させよ」

「門を固めよ、武任、女どもをまとめて逃がせ」

矢つぎ早に義隆の命令が発せられた。

都から来ていた公卿衆雅楽士、能匠、茶匠連歌師らが右往左往している騒ぎの中に義隆の「孤独」があった。義隆自身、先程側室に聞かせた「覚悟せよ」の一語を反芻していた。この時、最早義隆は己れの最後を考えていたのかも知れなかった。

館の中を馳け廻っていた武任が慌てふて走って来た。

「殿！黒川どの（宗像氏男）は五百騎にて干把ケ嶽に向かったそうにござります。して、毛利どの以下の勢が見えぬようにござりまするが！」

「うむー、余も変想をつかされたものと見ゆる。武任！覚悟はよいかの」

「えっ！」

見る見る武任の顔面が蒼白になった。彼には主家の滅ぶのがまさか旦夕に迫っているとは考えられなかったらしい。

「武任！この期に及んで何事じゃ」

今頃云ってもせん無い事とは分っていた。近侍に雑言を浴せる様では何事も終り、と思った。顔色を変えた武任を見て、義隆は「この期に及んで」事の実態を確かめようとした自分の迂闊さをまざまざと思い知った様な気がした。毛利、陶らの謀言が今頃になって懐しくさえ思われる、ということは どういう事であろうかと思った。

毛利勢が馳けつけないというのは「日和見」とも思えたが、不思議に毛利に対する憎しみの気持は起こらなかった。

危急に馳けつけた義隆の手勢は約三千。床几を立ち上った彼の行動は素早かった。

法泉寺の庭の水陣で主従のいさかいが起ったのは間も無くのことであった。

「武任、介錯せよ」

「殿、早まってはなりませぬ。家老どの（杉重矩）も追っつけ参りましょう故それよの法策を立てても遅くはありませぬ。防長の大守たる殿が此れ位のことで御害害は情無うござりまする。今暫く、暫くお待ち下され」

必死に止める武任の様子を見て、義隆の気が挫けた。時刻はいつも挨くに夕刻であった。

「敵の攻撃をゆるんだ様にございます。明日は御味方も増えましょう。ここは御辛棒が大切でござりまするぞ！」

思い止った主君を見て武任が勢い込んだ。

奇しくも去年、仁嶽八幡の社頭で陶尼張守隆房が最後の諫言を試みてから丁度一年目の出来事であった。

武任が強調したのにも拘わらず、同夜中に三千の手勢のうち、大半が本営を脱走したのは皮肉なことであった。

（つづく）

一方、陶は山口に向かって徳地

福岡交通センタービル地鎮祭

去る八月八日、福岡交通センター地鎮祭が執り行われた。福岡交通センターと云うので、特に交通安全の御神徳を以って知られている当宗像大社が司祭を受け持った。

式は午前十時より厳そかに始められ、修祓、降神、献饌と儀式は進み、久保宮司の祝詞があった。此の広庭を抜い清めて斎い奉り坐せ奉る掛まくも畏き宗像大神の大前に恐み恐みも申さく……今回此の処に株式会社福岡交通センターをつくり備えんと為る……此の工事に預る設計管理日建設計工務株式会社、株式会社間組の工匠等諸々には八十禍津日の福事あらしめ給わず……厳しく実わしく事終えしめ給えと……

続いて建設地を清める敷地抜があり、交通センター社長楠根宗生氏の鍬入れ、間組福岡支店長の杭打ちの儀、久保宮司の鎮めもの供等があった。この後玉串拝礼があって祭典は無事終了した。

この日参列した人々は、福岡県知事を始め内外の知名士二百余名であった。

この福岡交通センターは、昨年十二月新装なって移転開業した博多駅前に建設されるもので、約一六〇〇坪に地下一階、地上七階建となっているとの事、因みに株主は西鉄、国鉄、昭和自動車、九州産業交通、祐徳自動車、日田バス、堀川自動車等九州の大手運輸業者が加わっている。

総工費十二億円、設計管理は日計建設、施工は間組が当り、約一カ年の突貫工事で完成の予定である。博多駅前に威容を誇るビルが立派に完成する事を祈ってやまない。

〃我が社の車を語る〃

福岡日野自動車（株）
営業第二部次長
樗木雅春

Hino

優雅な伯爵婦人の気品を生かした車
〃コンテッサ〃

真紅の太陽が、宮殿の森に沈み、薔色迫る大庭園には、今、世紀の夜会の準備を終って、王侯貴族の来場を待つばかり、

まもなくシルクハットにタキシードの紳士が、きらびやかな、イヴニングドレスの淑女を伴い、次々に会場にあらわれる。

庭園のアーク灯が針葉樹の壮大な植木を照らし、大噴水を仰ぐ夢の園のシルエットが素晴らしい

やがて寡もたけなわの頃、一段と高く拍手が森にこだまして、純白のイヴニングドレスに、真珠のハットを手にして、微笑をたたえながら、静かに中央の舞台に、ゆかに流れる、ウインナーワルツのリズムにのって、長いすそをなびかせながら、あたかもエデンの国の天使のごとく、円舞に一堂の王侯貴族も、吾と吾身を忘れ、しばし茫然!!此の日のヒロイン〃伯爵夫人〃の清らかな美しさにみとれるばかり。……

此の幻想的な優雅な美しさを、そっくりそのまま、車のボディーラインに写しかえたのが我社が世界に誇るコンテッサ五人乗り乗用車なのです。コンテッサ（CONTESSA）とはイタリヤ語で伯爵夫人、の意味で、その名の通り、ボデーは優雅にしてかつ清楚、三年前の発売以来、衆目を集めて、今日に至っております。

我社は本来、トラック、バスメーカーとしては確固たる地盤を持ち、大型車輌の輸出は常に業界をリードして世界第一位の実績を持ち、十五t ダンプをはじめ、大型チーゼルにおいては業界のパイオニアとして、戦後の我国の産業復興に貢献して参りましたが、昭和二十八年、我国のモータリゼーションの要望にこたえ、フランスのルノー公団と提携して、ルノーの国産化を行い、貨物の大量輸送と、乗用車の徹底した経済性と云うメーカーの愛国的な良心は、その目的を二応達成したわけです。

しかし日毎に進展する社会事情は、より機動性豊かな車を求めるに至り、ルノーの技術を完全に吸収して我社独特のアイデアを加えて、経済性をそこなわず、しかもより秀れた機動性を持つ乗用車として、一九六一年三月、コンテッサが誕生したのです。

僅か九〇〇cc にも満たないエンジンで、一五〇〇 cc クラスの車に比較しても、劣ることなく、実に驚くべき性能を持ち、その素晴らしい加速性能に加えて、軽自動車なみの回転性能、安定した走行性能などは、まさしくドライバーの夢を実現したものとして、お客様各位に真の御満足をいたべき、非常に心強く、自信を深めている次第です。

伯爵夫人と共に、酒用に御通勤に、或は日曜日のドライブにと、楽しい夢や、優雅なムードをいっぱいに、走れコンテッサ!!幸せと希望を乗せて……。

アーク灯の灯が栄華な夜会をおしむ様に、又一つと消えて行く、あたりは次第に森の静けさに帰り、噴水の音ばかりが印象的に耳に残る。月光が静かに伯爵夫人の聡明な顔を照らし、明日の繁栄を信じ、希望にあふれるほほえみをたたえながら、静かに二頭だての馬車の人となる姿が今も忘れられない。

西鉄自動車教習生参拝

去る八月十九日、西鉄自動車教習所員及び教習生十数名が参拝した。同教習所が団体参拝をされたのは今年に入ってこれで三回に及んでいる。

今回で教習生を百数十名を送り出し、西鉄バスの運転等実際の業務につく事になったので、交通安全を祈って参拝されたものである。

祈願祭終了後、司祭の神職が「本日は皆様の御参拝を有難く存じます。又、教習生の皆様が今回無事教習課程を卒業され、夫々運転業務に就任される事は大きな喜びであると存じます。然し、現在の交通事情を見ます時、決して手放しで楽観出来ないのであります。

当宗像大社の御神徳の一つは交通安全であります。宗像大神に交通安全の御加護をお願いすると云う事はとりも直さず皆様が正しい運転をされる様神様にお誓いする事に他なりません。正しい運転をする為には、自分自身の心を洗い清めなければなりません。ですから皆様は先ずこれからの日常生活を正しく送ろうと心掛ける事から始めなければなりません。夜更かしをしない事、睡眠を良く充分に採る事、相手をいたわる暖い思いやりを持つ事等、この様な事から安全運転が生まれるのです。安全運転とは難しい事なのです。どうか就業される時、この様な事を心に留めておかれるならば幸いであります」

以上の様な挨拶があった。

× × ×

町村往来

◇武丸正助翁の伝記配付…孝悌武丸正助翁の遺徳顕彰会、立石昇氏（宗像教育委員長）らが中心となって同翁の伝記を編集中だったが、このほど完成、三千部を郡内の小学生徒へ無料で贈った。同書は『孝悌武丸正助伝』（佐々木滋冥著）を小学三、四年向きに書き改めたもの。教育庁宗像出張所職員らも協力、一年がかりで完成した。希望者は同町教委へ申し込めばよい。

◇宗像町婦人会レクリエーション講習会…7日午前9時、東郷小。

◇短銃、刀剣類の届け出呼びかけ…宗像署防犯係は8月中をこの届け出強調月間としている。刀剣類は正式に登録手続きをすれば所有を許されるものもある。（文化財関係）

◇八幡大学夏季法律巡回相談…11日午前10時～午後3時、東郷小、教授、学生ら多数が金銭、土地、家庭内のもめごとなどに応じる。

◇玄海町少年ソフトボール大会…玄海町公民館主催で、このほど玄海中学で各校区対抗で行なった。

◇婦人会政治講座…19日午前9時、水産高、婦人会、農協、漁協各婦人部、未亡人など百人が参加。話題は「町づくりと政治」

◇郡体育協会準備会…20日午前10時、町村会館二階、現在社会教育の一部として設けられているが、こんど郡内体育関係団体を一丸として組織編成するもの。

◇津屋崎ウナギ養殖場完工…18日午前10時から津屋崎町塩浜の現地で。徳島正一昭徳水産社長ら同社の関係者、寺島町長、宮津町議長ら町側代表、各魚市場などの業界関係、日野宗像署長、坂本保健所長ら、来賓など、約二百人が参加、式のあと盛大な披露宴を催した。同ウナギ場は昭徳水産（福岡市港町）が本年はじめ着工、敷地二万三千二百平方メートルに七面の養殖池があり、現在すでに千八百余キログラムのウナギが養殖中で、7月7日に初出荷し、好評だった。

◇勝浦バレーボール打ち合わせ…21日午後8時半、勝浦公民館同校区大会を計画しており、主催者側から説明を行なう。

（西日本新聞より）

新築完成
—玄海の味・生魚料理—
みなと荘

宗像郡玄海町神湊
電話 神湊 五六番

宗像伝説　其の四十二
占部尚持の戦死

占部家は代々宗像大宮司家の股肱として武威を張った。これはその二十一代尚持にまつわる話である。

彼の父は占部家第二十代尚安、母は宗像中務少輔の氏繁娘。彼の幼名は春王丸。天文十一年閏三月一日元服、弥次郎尚持と名乗る。

同二十四年四月七日、第七十八代宗像大宮司氏の手により加冠して右馬助と改名した。

時は戦国の乱世、宗像家は長州毛利に一味して北九州を固守していた。永禄二年の秋八月十六日（旧暦）、豊後の大友義鎮（宗麟）が攻めて来た。立花勢を案内として総勢三千余騎であった。毛利にくみする宗像を攻略してしまおうという心組みであったらしい。

大宮司氏貞は若冠十七才。武勇ならびなき名将であった。赤月表に近付いた敵に対して宗像の家臣らが馳せ集めた。そして家中の面々都合三千余騎が蘿ケ岳城を固めた。郡内中央の許斐城には占部甲斐守尚安一族が五百余騎で立籠り、薬の吉原城にはその子尚持が家来五百余騎で固めていた。

同日、豊後勢の総攻撃があり、岳山（蘿ケ岳）の天地に鯨波の声が揚った。氏貞が云った。

「敵は思いしよりは小勢なるぞ切って出て追い払え、者共！」

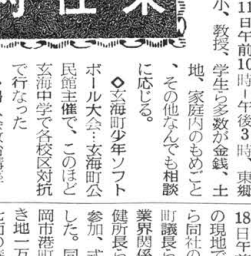
その声に第一番に感応守氏康、二番に深田氏俊、三番に占部種安が切って出た。寄せ手の先陣は戸次丹後守鑑連、二陣は奴留湯入道殿景、三陣は立花但馬守鑑載、その外にも奴留湯主水、高橋三河守が控えていた。

奴留湯主水が許斐城へ向おうとした機先を制して、尚持の嫡子宮若丸生年十五才になるのが長尾原に打って出た。この小勢なのを見て主水が什かけて来た。その所に去る六日敵動の時、赤間表に至って駐り合い防戦を遂げ、帰城の節長尾原に於て諸々に敵を取籠めし処、或いは之れを切り抜け、或いは少々屈けを致され城衆気遣い成さるべく候間、馳せ籠りなべく申し候処、父右馬助尚持事◇◇◇候、同十七日許斐表に単城に至って敵責懸かる名、剛つさえ討死候、不便の至り斜めならず候、愁傷察せられ候、忠儀誠に比類無く候、何様賀と うべく候悉々謹言

八月二十日　氏貞

占部宮若丸殿

宮若丸後の八郎貞保。この占部家はいま玄海町上八に続いている。



貞は若冠十七才。武勇ならびなき名将であった。赤月表に近付いた敵に対して宗像の家臣らが馳せ集めた。そして家中の面々都合三千余騎が蘿ケ岳城を固めた。郡内中央の許斐城には占部甲斐守尚安一族が五百余騎で立籠り、薬の吉原城にはその子尚持が家来五百余騎で固めていた。

同日、豊後勢の総攻撃があり、岳山（蘿ケ岳）の天地に鯨波の声が揚った。氏貞が云った。

「敵は思いしよりは小勢なるぞ切って出て追い払え、者共！」

その声に第一番に感応守氏康、二番に深田氏俊、三番に占部種安が切って出た。寄せ手の先陣は戸次丹後守鑑連、二陣は奴留湯入道殿景、三陣は立花但馬守鑑載、その外にも奴留湯主水、高橋三河守が控えていた。

奴留湯主水が許斐城へ向おうとした機先を制して、尚持の嫡子宮若丸生年十五才になるのが長尾原に打って出た。この小勢なのを見て主水が什かけて来た。その所に去る六日敵動の時、赤間表に至って駐り合い防戦を遂げ、帰城の節長尾原に於て諸々に敵を取籠めし処、或いは之れを切り抜け、或いは少々屈けを致され城衆気遣い成さるべく候間、馳せ籠りなべく申し候処、父右馬助尚持事◇◇◇候、同十七日許斐表に単城に至って敵責懸かる名、剛つさえ討死候、不便の至り斜めならず候、愁傷察せられ候、忠儀誠に比類無く候、何様賀とうべく候悉々謹言

八月二十日　氏貞

占部宮若丸殿

宮若丸の父但右馬助重安、但父源内右衛門尉安久と二騎当千のつわ者共が加勢に出て、ここを先途と戦った。宮若丸は初陣の首級を幾つかあげた。さっと許斐城に引揚げる後を敵が追撃した。そこへ右馬助尚持が三百余騎で打って出た。火花を散らして合戦数合、両軍相引きとなった。その時岳山に宗像軍の勝鬨の声があがった。

敵は「気を損じて」引き揚げた。

翌日奴留湯は昨日の鬱憤を晴らさんと千五百余騎で吉原城へ押寄せたものの、すでに勝負にはならず散々に追い散らされた。

戦場は阿鼻叫喚の巷であった。黒糸縅の鎧武者が倒れていた。戦死者と思って尚持が通り過ぎた。

ーと、武者が起き上って尚持の足を薙いだ。足の踝が落ちた。

不覚！尚持はすぐさまその武者の首をはねた。が出血はとまらない。許斐城への道半ばにして尚持は三十四才の生涯を閉じた。諱号建興院殿桂岩宗光居士。八並村に葬る。

大宮司氏貞の衝撃は大きかった。左の感状がそれを物語っている。

去る六日敵動の時、赤間表に至って駐り合い防戦を遂げ、帰城の節長尾原に於て諸々に敵を取籠めし処、或いは之れを切り抜け、或いは少々屈けを致され城衆気遣い成さるべく候間、馳せ籠りなべく申し候処、父右馬助尚持事◇◇◇候、同十七日許斐表に単城に至って敵責懸かる名、剛つさえ討死候、不便の至り斜めならず候、愁傷察せられ候、忠儀誠に比類無く候、何様賀とうべく候悉々謹言

八月二十日　氏貞

占部宮若丸殿

宮若丸後の八郎貞保。この占部家はいま玄海町上八に続いている

（H）

宗像大社献詠俳句作品集（三）

津屋崎　西住喜三郎

沿日今まろし苗さげ畦に芋ら
〃　井浦　良介
銀河濃し鉄の固さを冷めゆく恋
〃　占部　河童
台風圏去らずボートの大揺れに
〃　久羽　文王
朝顔の青一色咲き揃つ
〃　白石百合蔵
台風近し蘇鉄を赤き蟹襲じる
〃　毛利　夜潮
月に照る沖の高きに霊送る
〃　渋田しげを
扇半に海の重圧堂に初蝶
〃　吉野　鷹子
夏浪が眼下に砂す離職票
〃　安部真佐子
金魚草散髪きらつ子をあやす
〃　香立喜一郎
鼓笛隊の指揮棒ることし羽抜鶏

日立と共に五十年（四）

倉田主税会長の半生記

小倉工業で彼の成績は極めて良好で、一年から二年に進級の時にはクラスの一番であった。もつ一つのクラスでは山田正春という生徒がトップであつた。おそろしく元気の良い少年で、おとなしい性格の主税から見ると羨ましくなるくらいハキくとして級生に教師に向って全然平気な様子だった。彼が小倉工業に入学した時、すでに日露戦争は始まっていたが、その年の九月、講話条約が結ばれた。大国ロシアに勝った日本は、今や東洋一の強国として世界列強と肩を並べるに至つたのである。

二年から卒業迄、主税はずつと特待生であった。月謝は免除である。主税の外に山田を含め三人が特待生であった。三年の時、中村校長が去って教頭の藤川勝丸が昇格した。その年に県の方針で小倉工業の在学年限が三年から四年に一年延長されることになつたが、これより前、主税達三年に進むべき三年生がこれに反対し騒を起こしかけたことがあつたが、卒業する筈の三年生がおとなしく新方針に従って卒業を一年延ばしたため、遂にストライキには至らなかった。ところが三年生になつてから、再び生徒達の間に穏やかならぬ空気が漂いはじめたのである。「こんどの校長はウソつきだから、おとなしくしていると俺達はだまされるぞ」そう言って級友を説き回ったのは山田である。彼は藤川新校長に対してかなり露骨な反感を抱いていた。自分が世話になっている中村校長を追い出した張本人が藤川教頭であると信じていたからである。山田は新校長に対する反感がひどくなるにつれて、言行の上にはっきりしたレジスタンスを示すようになった。校長に会っても敬礼をしようとせずわざとそっぽを向いて通り過ぎるばかりか、エヘンなどと出もしないセキの音をさせたりする始末だった。おまけに運動場や、実習室でタバコをふかして見るのだ。「一年延長を承知するかわりに来年は一切教室の勉強をしないで一年間学校外工場に実習に行き、それで授業のかわりにしてもらい度い」三年生はこう言って学校当局に強く訴えたが学校側はきき入れなかった。「福岡工業ですら四年生の校外実習は半年ではないか、それなのに当校のみ一カ年の実習を認める訳には行かない」これが理由である。これに対して三年生は「福工は福工だ。何もよその学校の真似ばかりするのが能ではあるまい。我校は我校としての方針がある筈だ。」こう言われると学校側は困ったけれど、まさか生徒に負けている訳には行かない。「他校の真似をするのではない。就学年限を延長したそもくの趣旨は基礎的な勉強をみっちり学ぶためというのであるから、お前達がなんと言おうとも一年間の校外実習など認める訳には行かぬ」こう言ってつっぱねたのである。「もう勘弁できない」山田は熱弁をふるって校長及び学校当局を攻撃した。とうく三年生達は学校と正面衝突することになった。ストライキである。堺町の寺に集合して血判書まで作ったのだからなかくの大騒ぎだった。その結果、級長の主税が代表となって校長室に押しかけ、藤川校長を相手に強硬な直接交渉を開始した。平生はおとなしい主税が、その時は反抗児の山田に劣らない程の斗志を発揮して徹底的に校長に喰い下がったのである。藤川校長は大いに驚くと同時に、事態の容易でないことを悟り何回かの交渉の後、段々と要求を容れることになった。然し全面的に生徒の言い分を通すのは県庁に対する思惑もあるので、半カ年通学、半カ年実習ということに決った。だから主税達は四年生になってから、学校に通ったのは半年で、後の半年は工場に行って実習したのだ。

レジスタンスの山田はすっかり学校がいやになったけれど、学科の成績は依然として良好だった。ところが三年の三学期に行われた学年試験では、ひやりとするような思いをした。さすがの彼が前の晩いくら考えてもどうしてもあるカ程式が分らないのだ。「もしこれが問題として出たら俺は白紙答案を出すほかない」そう考えると彼は安眠することが出来なかった。翌朝早く目を覚ました山田は再びその方程式と取り組んだ。然しどうしても答が分らないのである。「仕方がない。学校へ行ってから倉田に教えて貰おう。あいつ以外に出来る者はいない筈だ」こう竟悟した途端、ふとインスピレーションの如く彼の頭の中に方程式を解く鍵がひらめき、すらくと分ったのである。「今日はお前に頭を下げようかと思った」そう言って山田は笑いながら主税に事のいきさつを話したが、負けすぎらいの彼は主税の前に降参せずに済んだのが余程嬉しかったらしい。

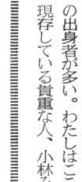
明治四十年の四月、四年生になったとき主税はやはりトップの成績で、しかも綜合点数が九十二点という抜群のものであった。約束通り半年通学したのち、半年の工場実習に出たが、主税が行った先は大阪にある大阪鉄工所であった。後にこれが日立造船となり彼自身も重役になったのであるから偶然というものはおもしろい。半年実習ののち、翌四十一年の三月に主税達は、小倉工業学校第六回卒業生として藤川校長から卒業証書を受けとった。山田は卒業後、土建の世界に入ったが、後に菅礼之助に認められて重用され、現在は関東電気化学工業会社の監査役として悠々自適の生活を送っている。

（文責　養父　守）

宗像藪庵先生百話

南方華やかなりし頃

宗像太郎坊



タンジョンバレー Tandjoeng-balai のネガガバというところに、小林みつという人が住んでいた。南洋のラシャメン Foreign ersmistress になった人は沢山いるが、この中でも天草あたりの出身者が多い。わたしはここに現存している貴重な人、小林みつ氏について彼女の数奇な一生を書き、その代表としたいと思う。

彼女は明治二十四年十二月二十六日、天草郡五和町御領に生れ、満十七歳で南洋に渡り、昭和六年日本に帰り、現在七十一歳、養子の仕送りで、かつがつの生活をしている。彼女は尋常四年まで学校に行き、その後、養蚕をやって家の手助けをしていた。蚕が大好きだといっているが、こんな事は、なんとなく人生の哀れさを感じさせる。天草の農家の貧乏なこと、またその貧乏な家庭に育つ児童のあり方がわかるような気がする。

天草郡は上島・下島・大矢島の三大島と多数の小島より成っているが島内には山が多く耕作面積が少ないので、人口過剰で、収入が少ない。このため海外に出稼ぎに行く者が自然と多くなった。特に下島では高浜村に次いで御領村が多くの女を海外に送った。

さて、小林みつの父についてであるが、小林みつ女に「金だらおゆき」という人が来て、シャムに養蚕を教えに行かないかと、とても儲かるよと、重ねがさねいわれるので行ってみる気になった。芳紀正に満十七歳。後から考えるとやはり誘拐の手に乗った訳である。バンコックに着いて訊いてみると、蚕を飼っている村はずっと山奥で、そこは虎や象が沢山おり、こわいこわいところだと聞かされ、つい止めて了った。そして十五百米の山坂を登るのは超重労働でありました。

日本海の大海戦当日は大西風で海上は大荒れで、朝来対馬の局賊捕り船が濃霧してこれを救助したのでこれを対馬に知らせるために打電の使に望楼に登りました。海軍の兵舎に通信も灯第も全員一堂に集って何か協議されて居るようでした。望楼長、この電報頼みますと頼信紙を渡すと望楼長が、今日は民間の電報は出来ないと断わられ、一枚の電信をこれ見よと示されました。忘れもしません。「敵の艦隊対馬水道を通過するものの知らせ」という警報でした。「では仕方ありません」と下山して宗像先生に「食物も喰べられず、ただ、プリンと果物と、時々、コックに頼みご飯に塩をつけたお握りを喰べ、二カ月、三カ月とたちましたが、白人が表から帰れば裏から逃げ出し、夜も外に出たまま、隠れていました。召使いが六人も居ましたが、みなわたしを可哀そうに思って泣き『ご主人は余り無理ですね、日本人の子供みたいな小さな人を連れ込んで、こわい目に逢わせ、ほんとに憎らしい』と話し合っていました。それから首飾り、腕環、腕時計、西陣の丸帯・着物など高価な物ばかり買ってくれ、すかされながらとうとう二十年間同棲して了いました。そのうち、四回目本へ帰り、五度目には戦争のこっちゃこっちゃで、日本へは行かれなくなりました」と。

（以下、本人の便りによる）

「食物も喰べられず、ただ、プリンと果物と、時々、コックに頼みご飯に塩をつけたお握りを喰べ、二カ月、三カ月とたちましたが、白人が表から帰れば裏から逃げ出し、夜も外に出たまま、隠れていました。召使いが六人も居ましたが、みなわたしを可哀そうに思って泣き『ご主人は余り無理ですね、日本人の子供みたいな小さな人を連れ込んで、こわい目に逢わせ、ほんとに憎らしい』と話し合っていました。それから首飾り、腕環、腕時計、西陣の丸帯・着物など高価な物ばかり買ってくれ、すかされながらとうとう二十年間同棲して了いました。そのうち、四回目本へ帰り、五度目には戦争のこっちゃこっちゃで、日本へは行かれなくなりました」と。

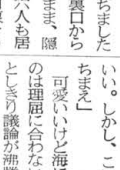
小林みつ

われわれの機帆船は無事、タンジョンバレーの港に着いた。この港は、トバ湖の水が、ポルセアでいっぱい溢れ落ち、これがアサハン河となって海に注ぐところ。広大な流れを前にしている。ここから汽車に乗ってメダンに帰るのであるが、しばらくしてもまだ分らないのである。「仕方がない。学校へ行ってから倉田に教えて貰おう。あいつ以外に出来る者はいない筈だ」こう竟悟した途端、ふとインスピレーションの如く彼の頭の中に方程式を解く鍵がひらめき、すらくと分ったのである。「今日はお前に頭を下げようかと思った」そう言って山田は笑いながら主税に事のいきさつを話したが、負けすぎらいの彼は主税の前に降参せずに済んだのが余程嬉しかったらしい。

明治四十年の四月、四年生になったとき主税はやはりトップの成績で、しかも綜合点数が九十二点という抜群のものであった。約束通り半年通学したのち、半年の工場実習に出たが、主税が行った先は大阪にある大阪鉄工所であった。後にこれが日立造船となり彼自身も重役になったのであるから偶然というものはおもしろい。半年実習ののち、翌四十一年の三月に主税達は、小倉工業学校第六回卒業生として藤川校長から卒業証書を受けとった。山田は卒業後、土建の世界に入ったが、後に菅礼之助に認められて重用され、現在は関東電気化学工業会社の監査役として悠々自適の生活を送っている。

（文責　養父　守）

我楽苦多告知板



○炎寒、中庭で捨て猫が鳴き立てる。うるさい。そこでY君がつかまえて来た。可愛い三毛の子猫である。

女子職員らが

「まあ可愛らしい」

「綺麗な子猫ねえ」

ここまではよかった

若いN君

「うーん、可愛いことは可愛いい。しかし、こいつは海に捨てちまえ」

可愛いけど海に捨てるというのは理屈に合わない。合う、合わないとしきり議論が沸騰致しました次第でございます。然るにその時、普段から気の強い美人のD嬢

「面倒だからぶっとばしてしまえ」

これには一同ダー。

○秋来ぬと目にはさやかに見えねども……

窓外の稲田を渡る風に思わず涼しさを感じる頃となった。山の端にかかる白い雲が紺碧の空に映えて一際鮮やかである。樹々の緑は緑の中に茶褐色の斑点を加え始めた夜半、中天にかかる月が美しくなる。落葉と共に、もののあわれを誘う秋は近い。

占いコーナー

今月より「占いコーナー」を設けました。衆生諸々の迷いに知らずく立ち入り易いものです。

もとより迷いは抜いによって除く事が肝要ですが、常住座臥一転の心機によっても晴れるものです。

このコーナーは当社崇敬の念厚い三大恵護氏が執筆いたします。

酉九月旧八月

（九月八日～十月八日）

★一白水星の人

明24・33・42大7昭2・11・20年生

先月は旧友、古い知人のために営業面で喜び事有り、家屋不動産の喜びも生じる月でした。今月は運気上昇、前進の月なれど、身近に深甚の御注意あれ、不測の出来事の暗示あり、福徳の面さき事有れど、二進一退様々うるさき事あり。常に天意と共に行う覚悟にて公平に行動せられよ、万事に堅実な日常の事の処理が思わぬ面に思実なる味方部下を発見する幸を得る。何事も上すべり早合点は凶

長男・電気・足・神経痛・左手・肝臓に注意

☆当分の吉方・北

★凶方・（月東北の間）坤（南西の間）乾（西北の間）巽（東南の間）

☆大図方・東西

あゝ常陸丸（五）

害され、数多の勇士は玄界灘の底の藻屑と消えたのであります。

この惨劇は沖ノ島望楼からは手に取る様に見えたのですが、前に述べた御用船は急報の役に立たず、旗を上げる信号柱の外には電信も電話もなく何等危急を救う施設なくこのなぶり殺しを目の前に見ながら地弾駄踏んで悲憤の涙を流しながら傍観するの外なく、ポートで漂着した百名計りの兵卒が沖ノ島で救助されました。

何も知らない筑前沿岸の漁村では夕立の遠雷と思い、西雷は鳥賊釣の大漁とはしゃいで居る者もあったが、夕刻にこの遭難から逃避した百の丸、金沢丸の二艘が神湊へ辿り着いて急報したので大騒ぎとなり筑前沿岸に非常会が降って全漁綜動員で救助出動、約百人を救助しました。この痛恨事によって通信防備の施設の必要に迫られ、下関より沖ノ島、沖ノ島よりの他の物資運搬をして居りました。水から米調味料等を背に担って信固定局として宿舎事務室の増設となり、海軍兵舎側に通信属一名技手二名と電信工夫一名が配置され、又灯台の前身である灯竿というランプを捧げる航路の標識が設けられ、灯竿看手二名が赴任して今の沖ノ島社務所の前に今は大砲若といって居ますそこに八糎砲が一門据えられて居ました。上陸する舟艇を防ぐ位のものと思われました。大海戦当時迄にそれ丈の施設が完備されました。海岸から望楼迄の電線は立木の枝を利用して配線され望楼と社務所との間にも電話が通ずるようになりました。望楼に常駐の人夫が大島の人で佐藤松之助、同十年、同市三郎という三人兄弟が雇われ、毎日十一名の軍人軍属達の生活必需品その他の物資運搬をして居りました。水から米調味料等を背に担ってニューホテルという旅館に女中奉公しようと思い、領事館に頼んだがなかなか条件がむつかしく、就職出来ず、遂に日本に帰される事になったが、その内、新聞広告をしたら、二十六歳ぐらいのオランダ人が貿いに来た。この人は錫関係の仕事をしている金持ちだが、一人ぼっちで他に白人の家族はいなかったという。この白人の家に住み込んだが、二カ月たっても白人の言葉はわからず、要求にも応じなかった。

内浦長畑房江
原町中村幸
村山田金丸柳蔵
吉留高山功子
江口辻野開造
福間尾郷須恵
吉武立石ろせ
名島久保房江
田島白雲山人
田島力丸登
勝浦永島計七
門司永島哲夫
原田松代
吉武原田
東郷藤崎辰子
武丸立石昇
戸畑山磨昌子
深田中野節子
〃原田リノ